いま伝えたい
――被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

〈3〉〝核兵器なくそう〟に反対する人はいない

岡山・倉敷市　渡田素子（わたりだ）さん（67）

「あの光景はよう忘れん」

原爆投下2年後の1947年3月15日、私は広島県の西の端にある小さな海沿いの町で被爆二世として生まれました。

8月6日の朝、食事をしていたら窓の外が光り、土壁が少し落ちたのを、当時4歳だった姉は記憶しています。父はあわてて姉を柱の前に座らせたそうです。

当時、広島市内からの建物疎開のため、かなり離れているこの町内にも勤労動員の割当てがありました。8月6日は父の当番でしたが、都合で行けなくなり、代わりに祖父の所で働いていた若者が行ってくれました。その若者を探しに父は、祖父のトラックで運転手さんと2人で広島市内に入りました。その日は彼を見つけられず、後日遺体となって帰ってきたそうです。母は、「事務をしていた女性と結婚することになっていたのに可哀想だった」と話してくれました。もし、父が行っていれば私は存在しなかったのです。

父の乗ったトラックは、たくさんの死体を積んで帰ってきたそうです。荷台からはみ出した手足がブラブラしているのを見た人が、「あの光景はよう忘れん」と言われていたそうです。

しばらくして、父の髪が抜け、体がだるいと言っていたそうです。その父も11年後の夏の朝、体調を崩して入院した病院で数日後に他界しました。子どもたちに囲まれ、母の歌を聞きながら亡くなりました。当時47歳、私が10歳の時です。母は医師から、父が原爆にあっていなかったか聞かれたそうです。

母は町内の小学校に運ばれてくる、被爆者の看護の手伝いを婦人会の人たちとしていました。手が足りず、国民学校の生徒さんも手伝ったそうです。シーツや浴衣を裂いて包帯にしていたと聞きました。

夫も4歳で被爆

私は25歳の時、結婚しましたが、夫は当時〝黒い雨地域〟に住んでおり、わずか4歳で被爆者になりました。

夫の父親は、広島市内で軍務中に被爆し、1週間後に救護所にいるところを見つけられ、疎開していた家族のもとに帰りました。背中に大きな傷を受け、寝ることもままならず薬の手当てもなく、9月30日に亡くなったそうです。うじ虫を取り、布を交換するだけの手当てに「それでも痛みが判らなかったのがせめても…」と、義母は言葉少なに話してくれました。

長男の妻であった義母のもとに、戦地から帰ってきた人が訪ねてきて、その人に家族の死を告げるつらさも話してくれました。7月の声を聞くと、義母から笑顔が消え、暗い顔になり、8月6日の慰霊祭には必ず出席していました。

最近の渡田さん

広島から遠く離れても

私は37歳で胃がん、39歳で甲状腺がん、以後ポツリポツリと4カ所のがんを発病しました。20人の同級生のうち私を含めて3人が甲状腺がんの手術をしています。被爆との因果関係は不明です。

3人の子の母となりましたが、私が二世健診を受ける時の医師への質問は、子どもたちへの影響です。「よくわかりませんね」「遺伝子が傷ついているわけですから…」という医師も。二世の被爆の実態は判らないのが実情です。

広島から遠く離れていても、その時生まれていなくても、核兵器はじわじわ攻めてくるのです。

核兵器をなくそうという署名を何年も続けてきましたが、反対する人に出会ったことはありません。核兵器も原発もない時代をつくる作業に、これからも加わっていこうと思っています。